

「コロナ・パンデミックと自殺」報告要旨

追手門学院大学

山田 陽子

コロナ禍において、日本の自殺は11年ぶりに増加した。この傾向は特に働く女性と若年層に強く見いだせるが、男性の自殺者数・自殺率は女性の約2倍を推移している。これまでも政府、地域社会、NPOや民間団体、学校等との連携・協働のもとに自殺予防対策がなされてきたが、コロナ禍においては電話やSNSを通じた相談窓口の拡充と各種社会資源とのネットワーク化が進んでいる。

近代社会は、死や自殺を隠蔽してきた。自殺予防のインフラ整備が進み、啓発活動も活発になる一方で、自殺それ自体は依然として見えにくく、自殺に対する偏見やタブー視も根強い。統計上の数値やコロナ関連自殺の報道に胸を痛めても、それらは「平穏な」日常生活と切り離されて理解されがちである。身近な人が「死にたい」と言った時、「そんなこと言わないで」と励ましたり、専門機関に紹介すれば事足りりとしてしまう。「死にたさ」がありのまま受けとめられることは少ない。

E.デュルケームは、人格の尊厳に至上の価値を置く社会では、たとえそれが自分の命であっても殺めるのは禁忌になると『自殺論』の中で述べている。自殺をあってはならないとみなすことは、自殺予防のエンジンになる一方で、自殺者や自殺遺族を排除するものともなりうる。人命や人格の尊厳を第一にし、模倣自殺を防ぎつつ、自殺や「死にたさ」についてオープンに議論する公共空間はどのようにして可能だろうか。本講演ではその点について考える。